『本気の教師、愛知の地に集う（発足会だより）』

元号が平成から令和に変わろうとする、平成３１年４月２７日、ＳＤＫの発足会が行われました。

世の中はゴールデンウィークの初日というのに、全国から４７名もの参加者が愛知に集まりました。

４７名の参加者には、ある共通した思いがありました。それは、

> 子どもの人生によい影響を与える道徳授業づくりがしたい

という、熱い思いです。

発足会を通して、４７人の熱い思いが化学反応を起こし、愛知の地で１つになりました。

以降、その様子を述べていきます。

【ＳＤＫ第１回全国大会「発足会」プログラム】

1．小さな道徳授業　模擬授業対決
- 発表者①　堀内遥香
- 発表者②　水流弘貴
- 発表者③　丸岡慎弥
- 参加者による判定・意見交流
- 代表からのコメント

2．視点１　小さな道徳授業づくり
- 実践発表・講座　牧園浩亘
- 代表からのコメント

3．視点２：教科書教材を生かす道徳授業づくり
- 実践発表・講座　平井百合絵
- 代表からのコメント

4．視点３：新たに開発した教材を活用した道徳授業づくり
- 実践発表・講座　猪飼博子
- 代表からのコメント

■ 小さな道徳授業　模擬授業対決（堀内遥香先生・水流弘貴先生・丸岡慎弥先生）

３名の先生は、以下の主題で授業を行いました。

堀内先生	「挨拶は〇〇〇〇になる第一歩」
水流先生	「ロッカーの使い方～１人くらいいいのでは？～」
丸岡先生	「いい記憶のライブラリー」

参加者が一番良かった授業を判定し、４名の先生が代表でコメントをしました。

先生方は「どの学年を対象とした授業だったのか」、「実際の素材と具体例のズレがあるのではないか」、「授業構成の視点ではどうなのか」、「素材の要素はどのくらい精選させるとよいのか」、という視点でコメントをされたので、授業を見る視点を増やすことができました。

代表からは、以下の話がありました。

> 選んだ素材の中から、『これだけは伝えたい！』という要素を精選し、その要素でどのように一歩先の深いところが伝わる授業にできるのか

今まで、素材の中に『伝えたいものがある』というだけで、教材化していました。『これだけは伝えたい！』という要素を精選する過程をしていなかったので、今後は、意識して授業プランを作成していきたいと思いました。

■ 視点１：小さな道徳授業づくり　実践発表・講座（牧園浩亘先生）

「愛知は、小さな道徳授業のネタの宝庫ですね」

講座前半に、牧園先生が発した言葉です。

なんと、牧園先生は、大阪から発足会会場までの道中で素材を見つけ、その素材を使って授業プランを作成し、講座でその授業プランを紹介したのです。素材を常に見つけようとする意識、つい見逃してしまいがちな、ささやかな出来事に目を向けようとする意識の高さに驚きました。

講座の半ばでは、牧園先生が考案した「小さな道徳授業づくりシート」を使って小さな道徳授業を考える体験がありました。「小さな道徳授業づくりシート」は、ねらいとなる「出合わせたい場面」から逆算して授業を構成しやすい形式となっていました。

代表からは、以下の話がありました。

小さな道徳授業でいいもの作ろうと肩に力を入れる必要は全然ない。たかが朝の会。そこでちょっと自分が感動したものを入れることで子どもの心に何か響く。そういうことを繰り返していくことで、もっと質の高い小さな道徳授業が作れるようになる。

まずは、つい見逃してしまいがちな素材に目を向けること、実践を多く積み重ねることが大切と思いました。

視点２：教科書教材を生かす道徳授業づくり 実践発表・講座（平井百合絵先生）

「なぜ困った顔をしているのでしょうか。」

この発問から、平井先生がどのようにこの教材を読んだのかがわかりました。

平井先生は、『新しい道徳１（東京書籍)』の「本が泣いています」（ＮＨＫ「道徳ドキュメント」制作班編）を活用して模擬授業をされました。ある市立図書館では、本が傷つけられたりよごされたり、無断で図書館から本が持ち出されてしまったりする問題が起きていて、司書である岩井さんが、図書館を守るために奮闘するお話です。

平井先生は、岩井さんの困ったことに注目させるために、挿絵から気付いたことを発表させ、その後、教科書の挿絵と「なぜ困った顔をしているのでしょうか」という発問をしました。本文を読む前には気づかなかった、岩井さんの本当の困り感に気付くことができました。

物語を読む前後に共通の発問をすると、表面的ではなく、深く内容を理解させることができる効果があることを学びました。

平井先生は、授業の終末で「たくさん制約がある図書館と制約がなく自由な図書館のどちらがいいか」と発問しました。この終末の発問に対して、代表は次の考えを述べられました。

岩井さんの理想とする“制約がなく自由な図書館”は、いわば当たり前の図書館。当たり前を理想と言わなきゃいけない現実についても考えさせたい。

図書館を利用する少数の人が問題を起こすことは「仕方ない」と感じてしまっていることで、「本来あるべき姿」を追究していくという意識が薄れていることに、代表の言葉によって気づくことができました。

■ 視点３：新たに開発した教材を活用した道徳授業づくり 実践発表・講座 猪飼博子先生

私は幾度となく、絵本の教材開発に挑んできましたが、なかなかうまく開発できませんでした。

猪飼先生の話を聞いて、自分が絵本の教材開発をする上で足りなかった視点に気付くことができました。

まずは、本当に面白い素材の選び方です。私は一度本を読み、面白いと思ったものを選んで、教材にしていました。しかし猪飼先生は、面白いと思った素材を構成要素に分けて、さらに面白い部分を再発見してから選んでいます。一度面白いと思っただけでは、その素材ならではの本当の面白さを子どもに学ばせることが難しいのです。その素材ならではの本当の面白さは、面白いと思った部分の構成要素からその面白さの再発見することでわかるということを学びました。

次に、面白い場面の選び方です。猪飼先生は、ソックスに穴が空いていることを指摘する場面と、友達が宿題を忘れたことを告げ口する場面、自分との感覚のずれを伝えると言う場面の３つを選択しています。この他に絵本には、友達が台詞を忘れて大勢の人の前で泣き出したことを言う場面や友達が悪いことをして罰をうけたことを言う場面、友達のお金が足りず先生からお金を借りたことを言う場面、馬にひどい言葉を浴びせられているのを主人公が聞く場面といろいろありました。この場面を授業の中に取り入れず、３つの場面を取り上げたのは、子どもたちにとってより身近な場面だったからだと思います。相手が気付いていない言いにくいことを伝えたり、相手が悪いとわかっていることを先生に伝えたり、自分との感覚のずれを伝えたりすることは日常的によくあることです。子どもにとって身近な場面であるかどうかという選ぶときの新たな視点を学ぶことができました。

■　代表による基調講演　（育てたい子ども像と道徳授業）

「何のために道徳授業をするのか？」

代表から参加者へ投げかけられた問いです。この問いに、みなさんは何と答えますか。

私は、自信をもって答えることができないなと思いました。

今の自分は、代表の話を聞き、自分自身がこの問いを問い続けるしかないと思いました。

代表による基調講演では、問い続けるための３つの視点を教えていただきました。

一つ目は、社会の動向から問うことです。今の価値観が１０年後、２０年後にも意味があるのかを考えることです。

二つ目は、公教育から問うことです。学校は何のためにあるのか、どんな力をつけるためにあるのかを考えることです。

三つ目は、心理学から問うことです。自由の相互承認の中の６Ｃｓ（シックスシーズ）が、今の自分の学級の子どもたちにどのくらい育っているのか、どういう状況なのかを考えることです。自由の相互承認とは、子どもたち一人ひとりの生きたい人生を、自分の〈自由〉と他者の〈自由〉を認め、尊重できることです。６Ｃｓ（シックスシーズ）とは、コラボレーション（Collaboration)、コミュニケーション（Communication)、コンテンツ（Content)、クリティカルシンキング（Critical Thinking)、クリエイティブイノベーション（Creative Innovation)、コンフィデンス（Confidence）のことを言います。子どもも大人も心からの幸せを実感し、人生を楽しむために必要な６つの能力と言われています。

日頃から、３つの視点に関心を向けて、何のために道徳授業をするのかを問い続けていきたいと思います。

発足会を通して、「子どもの人生によい影響を与える道徳授業づくり」ができるようになりたいという思いが強くなりました。

今回発表された先生方のオリジナリティーあふれる発表に、刺激を受けたからです。

代表はよく「日頃の積み重ねが大切」と言います。

学んで終わるのではなく、それを日々の実践に生かしていきたいと思います。

発足会参加者による感想

１．小さな道徳授業 模擬授業対決

３人の先生の模擬授業を通して、「身近なものにも様々な心遣いがある」ということに気づくことができました。漢字の語源に迫ったり、教室環境の細部に目を向けたりする授業は、とても新鮮で引き付けられました。発表される先生方が、それぞれの視点でお話をしてくださったので、私自身の視野を広げることができました。

（Ａさん、愛知県小学校教員）

■ 視点１：小さな道徳授業づくり 実践発表・講座（牧園浩亘先生）

「小さな道徳授業」は自分でもできると思ったのと同時に、普段の道徳授業を変えていける突破口になると感じました。

（Ｂさん、大阪府小学校教員）

■ 視点２：教科書教材を生かす道徳授業づくり 実践発表・講座（平井百合絵先生）

教科書教材をどのように使って授業をすればよいか迷われている先生は多いと思います。私もそうでした。模擬授業を受けながら「自分ならどのように発問しようかな」と考えることで、より一層学びを深めることができました。そして、参加者の先生とも、どのように授業を展開するのか話し合えたことは、貴重な経験となりました。

（Ｃさん、愛知県小学校教員）

日頃、教科書教材を効果的に活用した授業づくりに、私は難しさを感じていました。しかし、教科書の活用方法について、その教材ならではのねらいを設定する、教材に興味をもたせる工夫をする、意表を突く発問をする、全員参加させる工夫など、具体的にどんなことを意識しながら授業を行っていくとよいのかについて具体的に学ぶことができました。

（Ｄさん、愛知県小学校教員）

■ 視点３：新たに開発した教材を活用した道徳授業づくり 実践発表・講座 猪飼博子先生

教科書教材の中にも、色あせず何年も掲載され続けているお話がいくつもあります。それと一緒で、何年経っても使えるような自作教材を発見し、実践を提案したいと思いました。

（Ｅさん、大阪府小学校教員）

■ 代表による基調講演 （育てたい子ども像と道徳授業）

教材開発はたくさんしてきたと思ってはいますが、その素材を見つけるアンテナを今後もますます張り巡らしておかないと脳みそがさびてしまう!と痛感しました。【今回のセミナーでは、そんな脳に刺激を与えるとともに、私も似たような教材を見つけていることに嬉しさを感じました。今後も自分自身の感覚(自分が感動したりこれはと思ったりしたものを見つけること)を大切にしたいと思いました。】

（Ｆさん、長崎県中学校教員）

鈴木健二先生からは、短い言葉で的確なコメントがあり、授業というものの奥深さを教えていただきました。また、鈴木健二先生は、現場での困り感に寄り添ってお話をしてくださり、大変勇気づけられました。予測不可能な社会に向けて、どのような教育が必要かを語ってくださいました。

（Ｈさん、愛知県小学校教員）

■ 全体を通しての感想

「特別の教科」になった道徳の授業を考えていくことは、きっと、より良い学級経営や、子どもたち 一人一人の成長につながっていく。そんな授業づくりを私も考えていきたい！ 参加後、私にはそんな思いが強くなりました。

（Ｉさん、愛知県小学校教員）